

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19601006
研究課題名（和文）「定量的研究機関評価・研究評価のための「アウトリーチ指数」開発可能性の研究」
研究課題名（英文）Study on “Outreach index” development possibility for quantitative research laboratories evaluation and research evaluation
研究代表者
小林 俊哉（Kobayashi Toshiya）
富山大学 地域連携推進機構 特命教授
研究者番号：90345140

研究分野：科学技術政策
科研費の分科・細目：大学改革・評価
キーワード：研究評価、研究機関評価、アウトリーチ、サイエンスカフェ、サイエンスショップ、産官学連携、広報分析、テクノロジープランディング、科学技術基本計画

1. 研究計画の概要

平成 18 年 3 月 28 日に閣議決定された第 3 期科学技術基本計画の第 4 章には研究者と国民が互いに対話しながら、国民のニーズを研究者等が共有するための双方向コミュニケーション活動であるアウトリーチ活動を推進するとの規定がある。この規定から今後は「アウトリーチの度合い」が研究機関評価・研究評価の重要な指標となることが予測される。そこで本研究計画では次の 3 点を研究期間内に実現することを目指す。(1) 学術活動におけるアウトリーチの意義と本質を確認する。(2) アウトリーチの度合いを研究機関評価・研究評価の定量的指標として確立する可能性の探索（これを仮に「アウトリーチ指数」と命名）。(3) 研究機関・研究者が自律的・主体的なアウトリーチ活動を推進するための指針・手法を確立する。

2. 研究の進捗状況

20 年度、21 年度までに本研究において実施した、大学等国内研究機関へのアンケート調査結果から、科学研究費補助金配分額上位 100 件（平成 20 年度）の大学を中心とする国内研究機関ではアウトリーチを意識した広報活動が専任の広報担当者（75%で任命）によって、独立した広報部門（過半数で設置）により遂行されており、研究者と広報担当者が協力し合って遂行されていることが判明した。8 割を超える研究機関で研究者は広報活動に協力的であることも判明した。一方で、第 3 期科学技術基本計画の第 4 章第 2 節「科学技術に関する説明責任と情報発信

の強化」の政府方針については、「内容を良く知っている」という回答は全体の 2 割にとどまり、同方針の周知は国内研究機関に不徹底である実態も判明した。

また本研究の主要目的である「アウトリーチ指数」の開発可能性については、アンケート調査結果から、各研究機関の広報担当者が所属機関のマスメディアにおける報道状況をどれだけ把握しているかを問う設問で、マスメディアに報道される所属研究機関の記事等のモニタリングを行っている比率が 59.1%（平成 20 年度、21 年度調査の平均値）であり、過半の研究機関でマスメディアのモニタリングを行っていることが判明した。このことからアウトリーチの度合いを定量的に測定する準備、能力は各研究機関において整備されており、実行可能性が高いという知見が得られている。

3. 現在までの達成度 ②おおむね順調に進展している。

21 年度までに予定していた WEB 調査、大学等国内研究機関向けアンケート調査を終了し、研究目的である「アウトリーチ指数」の国内研究機関による開発可能性について一定の知見が得られたことから②と判定する。

4. 今後の研究の推進方策

本年度（平成 22 年度）は、本基盤研究（C）の最終年度であり、研究目的（1）～（3）の課題の総括を行う。具体的には 19 年度に実施した WEB 調査、20 年度と 21 年度

に実施した国内研究機関アンケート調査の結果を基に学術活動におけるアウトリーチの意義と本質について国内研究機関が実際に行っている取り組みを把握した上で明確化する。その後、それらの取り組み実態を基に「アウトリーチの度合いを研究機関評価・研究評価の定量的指標として確立する可能性」について一定の結論を抽出する所存である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 小林 俊哉 「アウトリーチ活動を研究者・研究機関評価の対象に加えるべき」 『科学』 「ウェブ広場」 岩波書店 2010年

② 小林 俊哉 浅野 浩央 「生涯学習の場としてのサイエンスカフェ」 『知識創造場論集』 北陸先端科学技術大学院大学・科学技術開発戦略センター 第4巻 第5号 pp.9-19 2008年

③ Toshiya Kobayashi, Saburo Ogata, Possibility for the application of Publications analysis to evaluation of research institutes, JOURNAL OF TELECOMMUNICATIONS AND INFORMATION TECHNOLOGY National Institute of Telecommunications Warsaw, Poland, 4, pp.59-62, 2007

[学会発表] (計6件)

① 小林 俊哉 緒方 三郎 「国内の大学等研究機関におけるアウトリーチ活動の実態」 第24回研究・技術計画学会年次学術大会. 2009, 10, 24-25. 東京 成城大学. (一般講演)

② 樽田 泰宜 小林 俊哉 「北陸地域における『サイエンスカフェ石川』の試み」 サイエンスアゴラ 2009, 科学技術振興機構, 10, 31-11, 3, 東京, 東京国際交流館 (ポスター発表)

③ 小林 俊哉 「地域社会と大学の連携を促進するサイエンスカフェ」 科学技術社会論学会 第7回年次研究大会 大阪大学・豊中キャンパス 2008年11月9日

④ 小野 道真 小林 俊哉 「石川県能美市における『サイエンスカフェ石川』の発展的な実践」 サイエンスアゴラ 200 科学技術振興機構 2008, 11, 22-23, 東京, 東京国際交流館 (ポスター発表)

⑤ 小林 俊哉 「研究機関のアウトリーチ活動における技術ブランディングの重要性」 テクノロジーブランディング研究会 2008年9月24日, 東京・赤坂パークビル

⑥ Toshiya Kobayashi, Saburo Ogata, “Possibility for the Application of Publications Analysis to the Evaluation of Research Institutes “ VI International Conference on Decision Support for Telecommunications and Information Society July 18-20 2007, Warsaw, Poland

[図書] (計 件)

※ 現在、研究分担者の緒方 三郎特任准教授と共著で図書刊行を準備中。
タイトル予定: 『大学・研究所のアウトリーチ活動』
出版社予定: JAIST-Press

[その他]

研究代表者が指導し所属教育機関において実施したアウトリーチ活動。サイエンスカフェによるアウトリーチ活動の可能性を探索した。

① 「カフェでサイエンス—JAIST 生の新しい取り組み—」 2007年5月26日

② 「液体窒素ってなんだろう? ~ 『-196°Cの世界へ』 ~」 2007年8月7日

③ 「アートのパワー」 2007年10月27~28日

④ 「有機 EL の魅力と癒し効果」 2008年2月23日

⑤ 「光触媒って何?—光が織りなす科学の世界へようこそ—」 2008年6月7日

⑥ 「北陸先端大学生の研究生活と日常生活」 2009年3月14日

⑦ 「グリーンマップの魅力—Think Global, Map Local の視点から—」 2009年6月6日

⑧ 「カフェ DE サイエンス~NOMI ながらサイエンス~」 2009年11月28日

□ 「カフェ DE サイエンス No2.~能美市環境基本計画実践編~」 2010年1月23日